

令和6年 東京都人口動態統計年報 (確定数) のあらまし

1 出 生

出生数は2.5%減少

令和6年の出生数は84,207人で、前年の86,348人より2,141人(2.5%)減少した。人口千人当たりの出生数を表す「出生率」は6.3で前年の6.4より低下した。

【人口動態統計年報(以下「年報」という。)第1表】

全国の出生率は5.7で【年報第5表】、前年の6.0より低下した。

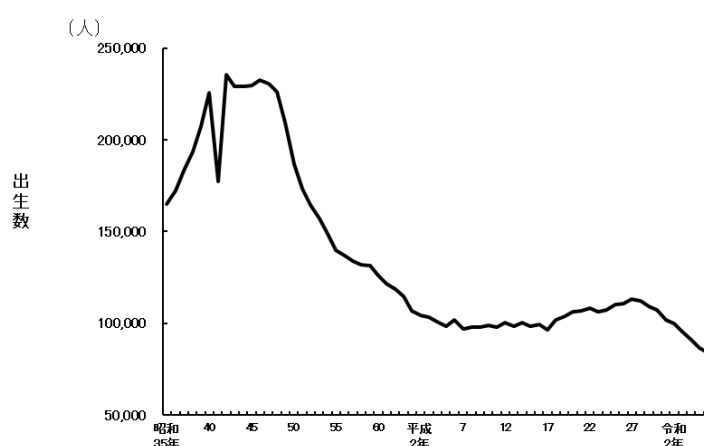


図1 出生数の年次推移(東京都)

合計特殊出生率は0.03ポイント低下

令和6年の合計特殊出生率※は0.96で、前年の0.99より0.03ポイント低下した。(年報「調査の概要」の「6 利用上の注意」(3)を参照)

【年報第3表】

区市町村別にみると、区部での最高は中央区(1.25)、最低は豊島区(0.84)、市部での最高は稲城市(1.22)、最低は国立市(0.88)、町村部での最高は小笠原村(2.01)、最低は青ヶ島村(出生なし)だった。

【年報第15表】

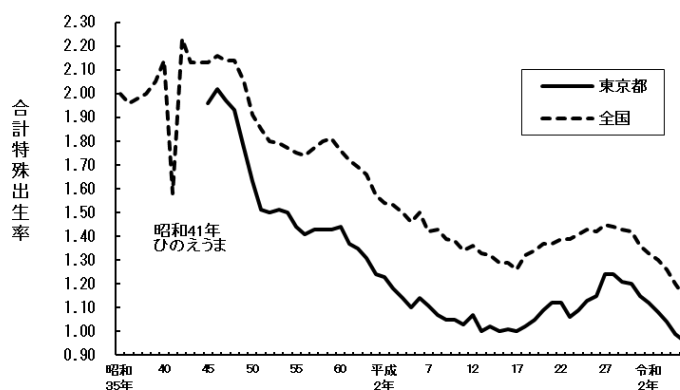


図2 合計特殊出生率の年次推移(東京都、全国)

注 昭和44年までは、東京都の継続した数値はない。

※ 合計特殊出生率

15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの。

1人の女性が仮にその年の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子供の数に相当する。

なお、算出に用いた出生数の15歳及び49歳には、それぞれ14歳以下、50歳以上を含んでいる。

45 歳～49 歳、50 歳以上を除く全ての階級で出生数が減少

出生数を母の年齢（5 歳階級）別にみると、45 歳～49 歳、50 歳以上を除く全ての階級で前年より減少した。また、出生数総数は 9 年連続で減少しているが、45 歳以上では多少の増減はあるものの増加傾向にある。【年報第 6 表】

一方、平成 10 年からは 25～29 歳に代わって、30～34 歳の出生数が最多となり、更に、平成 21 年からは 35～39 歳の出生数が 25～29 歳の出生数を上回っている。（図 3）

全国と東京都の出生割合を比較すると、30 歳代及び 40 歳代、50 歳以上の出生割合は、いずれも東京都の方が高くなっている。（表 1）

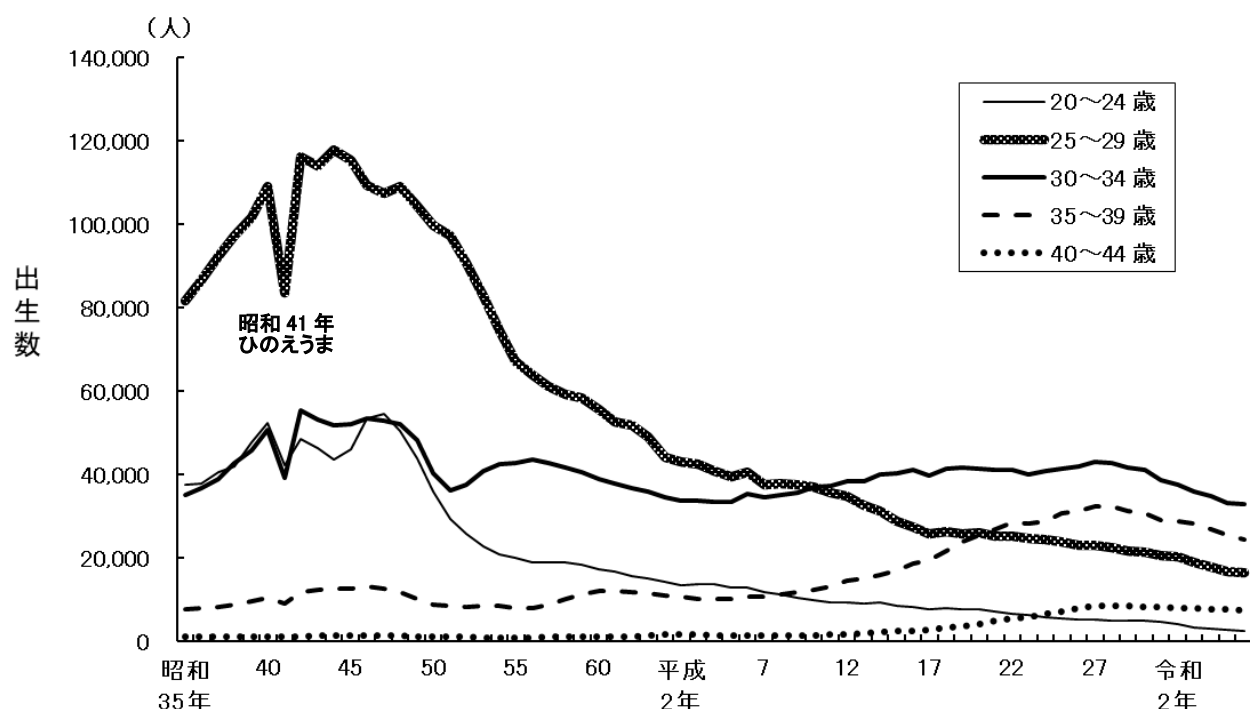


図 3 母の年齢別出生数の年次推移（東京都）

表 1 母の年齢別出生数、総数に対する割合（令和 6 年）

母の年齢	15歳未満	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上	総数
全 国 東 京 都	出生数（人）									※
	27 1	4,231 208	42,757 2,412	177,838 16,355	253,444 32,995	162,659 24,438	43,471 7,445	1,609 326	125 27	
全 国 東 京 都	割合（％）									100
	0.004 0.001	0.617 0.247	6.231 2.864	25.917 19.422	36.936 39.183	23.705 29.021	6.335 8.841	0.234 0.387	0.018 0.032	

全国…「令和 6 年(2024)人口動態統計（確定数）の概況」第 4 表－6 表（厚生労働省）

※総数には母の年齢不詳を含む。

2 死 亡

死亡数は 2.3%増加

令和 6 年の死亡数は 140,329 人で、前年の 137,241 人より 3,088 人 (2.3%) 増加した。人口千人当たりの死亡数を表す「死亡率」は 10.4 で、前年の 10.2 から 0.2 ポイント上昇した。【年報第 1 表】

全国の死亡率は 13.3 で、東京都の方が低い値となっている。【年表第 5 表】

地域別に死亡率をみると、区部は 9.4 で東京都全体 (10.4) より低くなっている。

一方、市部は 10.9、郡部は 20.9、島部は 19.4 で東京都全体 (10.4) より高くなっている。【年報第 4 表】

また、乳児死亡数 (生後 1 年未満の死亡) は 113 人で、前年の 135 人より 22 人 (16.3%) 減少した。出生千人当たりの乳児死亡数を表す「乳児死亡率」は 1.3 で、前年の 1.6 より低下した。新生児死亡数 (生後 4 週未満の死亡) は 53 人で前年の 60 人より 7 人 (11.7%) 減少した。出生千人当たりの新生児死亡数を表す「新生児死亡率」は 0.6 で、前年の 0.7 より低下した。【年報第 1 表】

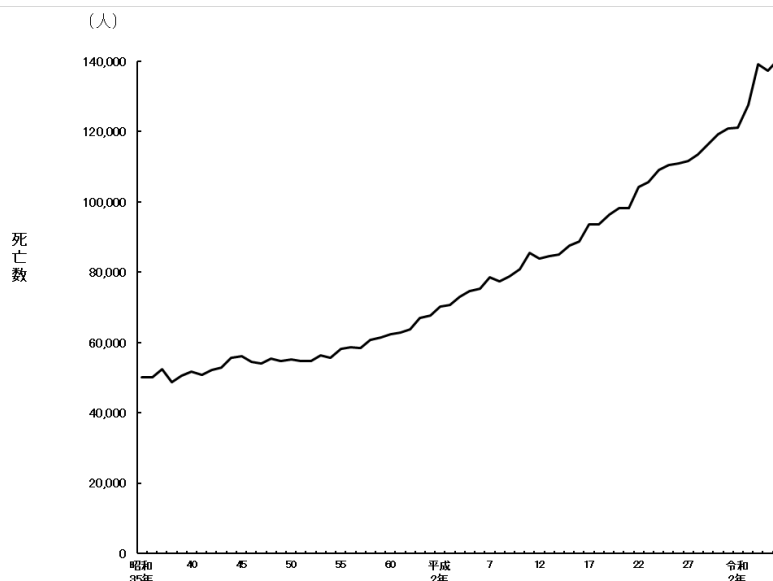


図 4 死亡数の年次推移 (東京都)

死因別死亡数は「悪性新生物<腫瘍>」が第一位

死因別にみると、死因順位の第一位は昭和 52 年以降連続で「悪性新生物<腫瘍>」である。「悪性新生物<腫瘍>」による死亡者数は 34,610 人 (死亡者総数 140,329 人の 24.7%) で、前年の 34,276 人より 334 人 (1.0%) 増加した。

第二位は「心疾患」(死亡者総数の 14.7%)、第三位は「老衰」(同 13.8%)、第四位は「脳血管疾患」(同 6.0%)、第五位は「肺炎」(同 4.6%) となっている。全国も上記の順位は東京都と同じである。

「老衰」は平成 12 年以降上昇し、平成 30 年から死因の第 3 位となっている。

【年報第 8・9 表】

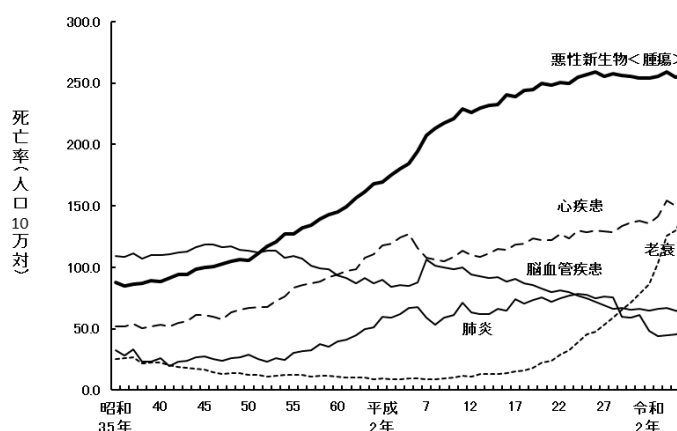


図 5 主要死因別死亡率の年次推移 (東京都)

3 自然増減

自然増減は9年連続減少

令和6年の自然増減※数は△56,122人で、9年連続の自然減となった。(前年は△50,893人、前々年は△48,167、3年前は△32,245人)【年報第2表】

また、人口千人当たりの自然増減数を表す「自然増減率」は△4.2で、前年の△3.8より低下した。【年報第1表】

※ 自然増減

出生数から死亡数を減じたもの

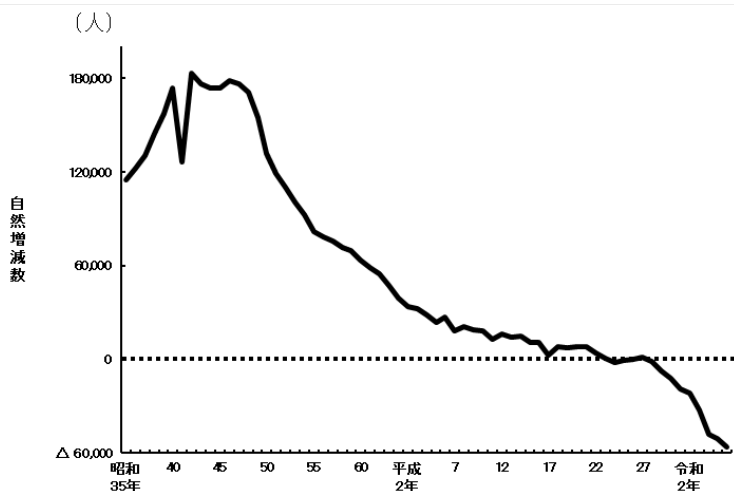


図6 自然増減数の年次推移（東京都）

4 死産

死産数は増加

令和6年の死産数は1,938胎で、前年の1,934胎より4胎（0.2%）増加した。自然死産は762胎で前年の799胎より減少しており、人工死産が1,176胎と前年の1,135胎より増加した。

また、出産千人当たりの死産児数を表す「死産率」は22.5で、前年の21.9より上昇した。【年報第1表】

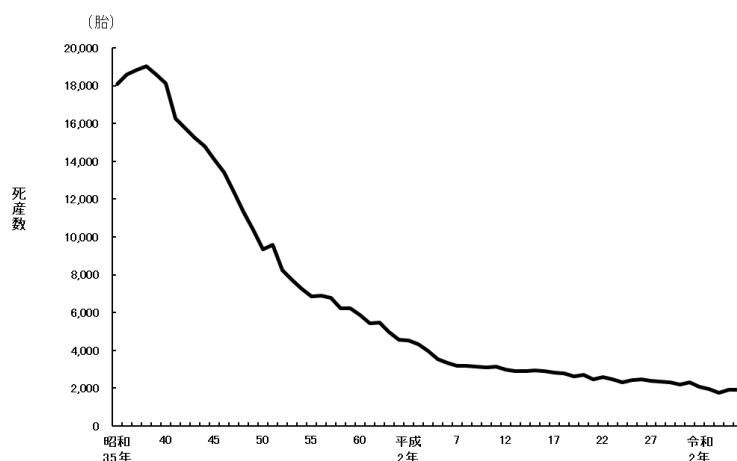


図7 死産数の年次推移（東京都）

5 婚 姻

婚姻件数は増加

令和6年の婚姻件数は76,441組で、前年の71,774組より4,667組(6.5%)増加した。

人口千人当たりの婚姻件数を表す「婚姻率」は5.7で、前年の5.3より上昇した。【年報第1表】

全国の婚姻率は4.0で、東京都の方が高い値となっている。

地域別にみると、区部は6.2で東京都全体(5.7)より高く、市部は3.5、郡部は2.4、島部は3.5で東京都全体より低くなっている。【年報第4表】

東京都の平均初婚年齢は夫32.2歳(全国:夫31.1歳)で前年より低下した。妻30.7歳(全国:妻29.8歳)で、前年と同じであった。なお、都道府県別に見ると、東京都は夫・妻とも全国で最も高い。(表2)

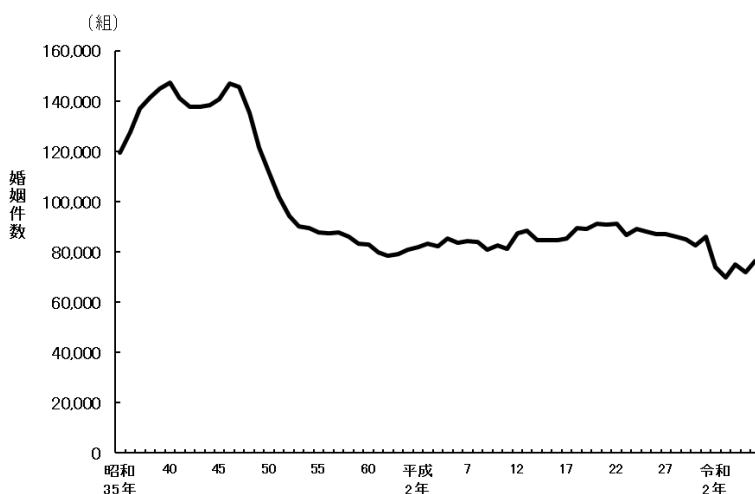


図8 婚姻件数の年次推移(東京都)

表2 平均初婚年齢、東京都と全国と比較

	令和5年		令和6年	
	夫	妻	夫	妻
全国	31.1	29.7	31.1	29.8
東京都	32.3	30.7	32.2	30.7

出典:「令和6年(2024)人口動態統計(確定数)」婚姻 第9-12表
(厚生労働省)

6 離 婚

離婚件数は増加

令和6年の離婚件数は20,424組で、前年の20,016組より408組(2.0%)増加した。

人口千人当たりの離婚数を表す「離婚率」は1.52で、前年の1.49より上昇した。【年報第1表】

全国の離婚率は1.55で、東京都の方が低い値となっている。

地域別にみると郡部は1.60、島部は2.27で東京都全体1.52より高く、区部は1.50、市部は1.30で東京都全体より低くなっている。

【年報第4表】

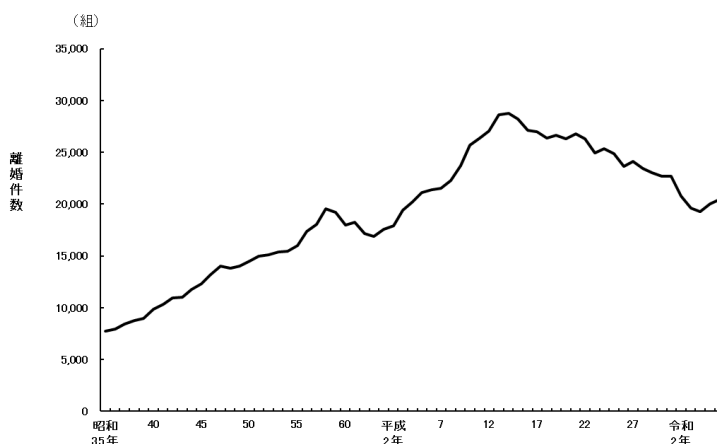


図9 離婚件数の年次推移(東京都)